

幼 兒 の 教 育

昭 和 十 一 年 十 月

十 月

秋は園の丘の大銀杏樹のてつぺんから来る。茂り重ねて日光も通さないやうに黯ずんだ密葉の蔭に、先づ青く見つけ出されるものは、その柄の長い實である。それが一日々々肉つき色づいて来る。或る夜の風にみんな落ちて仕舞つたのかと思つて上を見るに、尙更多くなつてゐるやうにさへ思はれる無数の數だ。やがてその葉の色が、山の背のやうな北側から次第に黄ばみかけたと思ふに、或る朝寒にはもう眩しいやうな満樹の黄葉だ。朝日を迎へて輝く光、夕日に映えて照る光を見ずとも、澄みきつた碧空に、燦として聳立してゐる眞晝の雄姿の神々しいことよ。

私達は、その樹の下に子きも等しいつしよにゐて、偉なるものゝ前にゐる小さきものゝ心を寸差を捨てた^{つた}_まに感じさせられるのである。有り難いことは仰ぐものをもつことである。

(倉橋惣三)